

学生海外調査研究	
バルトークによるスケッチ・草稿及び校訂楽譜の調査研究 ～1926年のピアノ作品を中心に～	
氏名 木村 優希	比較社会文化学専攻
期間	2018年8月23日～2018年9月6日
場所	ブダペスト（ハンガリー）
施設	ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイヴ、 リスト音楽院中央図書館及びサウンド・コレクション

内容報告

1. 本海外調査研究の目的と調査対象資料・調査方法

1.1 本海外調査研究の目的

本海外調査研究は、①20世紀ハンガリーの作曲家バルトーク・ベーラ Bartók Béla(1881-1945)によって1926年に作曲されたピアノ作品の一次資料の閲覧調査、②バルトーク自身の演奏による音源資料の視聴を通じて、対象とするピアノ作品の作曲過程を概観するとともに、作曲家自身がどのような音のイメージを持って作曲や楽譜の記譜の模索を行っていたのかということについて考察することを目的としている。

報告者は、バルトークの約55年に渡る創作活動の中でも特に1926年に注目している。バルトークは1926年の6月以降、《ピアノ・ソナタ》BB88¹、《戸外にて》BB89、《9つのピアノ小品》BB90、《ピアノ協奏曲第1番》BB91という4つの重要なピアノ作品を集中的に作曲しており、この年は「ピアノの年」と呼ばれている（伊東 2010：(6)）。1924～1925年にかけての創作活動のブランクや（伊東 2010：(6)）、この年以降、それまでピアノ独奏作品として積極的に創作していた「民俗音楽編曲作品」をほとんど作曲しなくなるなどからも（木村 2015）、この年の創作活動は「バルトークの経歴において最も激しい転換点の一つ」（Somfai 1996：484）であると言える。報告者は博士論文の執筆に向けて、この年に作曲された上記4つのピアノ作品に焦点を当て、彼が生涯を通じて没頭した民俗音楽研究との関わりや、伝統的な西洋芸術音楽の系譜における彼の創作の立ち位置、またピアニストとしての側面などから、これらの作品の創作においてバルトークがどのような手法を試行していたのかということについて多角的に考察することを目指し、現在研究・調査を進めている。

上記のような目的により、研究対象となる当該年のピアノ作品のスケッチや草稿といった一次資料を閲覧してその作曲過程を詳細に検討することは、博士論文の執筆に向けて必要不可欠な調査であることが言える。また、バルトークの記譜の特徴であるアーティキュレーションの細かな書き分けや（木村 2015）、一次資料に見られる自筆の加筆・修正部分を詳細に検討するためには、バルトーク自身の演奏による音源資料を視聴することによって作曲家自身が持っていた音のイメージをより具体的に捉えておくことは、重要な助けとなる。従って本調査では、現地ブダペストでしか閲覧できない、研究対象の作品の一次資料と、作曲家自身の演奏による音源資料を2本の柱として、調査を行うこととした。

1.2 調査機関と調査対象資料・調査方法

本調査研究では、バルトークの作品の一次資料を閲覧できる「ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイヴ」と、バルトーク自身の演奏による音源資料がまとまっている「リスト音楽院中央図書館及びサウンド・コレクション」の2つの機関を訪問し、調査を行った。以下では、訪問機関ごとに調査対象資料と調査方法について述べる。

1.2.1 ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイヴ

「ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイヴ」（以下では、通称である「ブダペスト・バルトーク・アーカイヴ」と表記することとする）では、研究対象としているピアノ作品の一次資料の閲覧調査を行った。

当初、《ピアノ・ソナタ》BB88、《戸外にて》BB89、《9つのピアノ小品》BB90、《ピアノ協奏曲第1番》BB91の4つのピアノ作品全ての一次資料を調査することを計画していた。しかし、バルトークの資料研究について詳しくまとめているショムファイ・ラーズロー Somfai Lászlóによる1996年

の著書“Béla Bartók: Composition, Concepts, and Autograph Sources” (Somfai 1996) より、《ピアノ・ソナタ》BB88 と《戸外にて》BB89 の一次資料（特に、第一草稿と第二草稿）については、一連の資料の中に両方の作品の草稿段階の楽譜が混在しているなど、他の一次資料と比べてより複雑な状態になっていることが分かった。そのため、訪問日数を鑑みるに、上記 4 作品全ての一次資料を調査することは不可能であると判断し、今回の調査では複雑な資料状況の全体像の把握と記載事項の確認を優先的に行い、《ピアノ・ソナタ》BB88 と《戸外にて》BB89 の一次資料を主として調査を進めることとした。実際には、この 2 作品に加え《9 つのピアノ小品》BB90 の一次資料も、ほとんど全てを用意していただいた。これらの作品の一次資料の一覧については、上記の著書 (Somfai 1996) の巻末付録“List of Works and Sources”より pp.310-311 を参照してほしい。

調査方法は 2 つに分けられる。1 つは、上記一次資料の一覧と実際の資料を照らし合わせて、それぞれの資料がどのような状態のものなのか具体的に確認すること。もう 1 つは、それら一次資料の内容の検討である。具体的な検討方法としては、それぞれの資料について①現行の出版譜²との比較、②加筆・修正部分の内容の検討を主として行った。

1.2.2 リスト音楽院中央図書館及びサウンド・コレクション

「リスト音楽院中央図書館及びサウンド・コレクション」(以下、「サウンド・コレクション」とする)では、バルトーク自身の演奏による音源資料の視聴を行った。

事前の問い合わせにより、リスト音楽院の中央図書館は、現在のメインのキャンパスである Liszt Ferenc tér 8 番地の建物内のほか、Vörösmarty utca 35 番地にある当音楽院旧館にも分室があり、今回調査を行なったサウンド・コレクションはこの旧館の 3 階に位置していることが分かった。なお、同じ建物の 2 階には「リスト・フェレンツ記念博物館」があり、この建物は作曲家でピアニストのリスト・フェレンツが暮らした住居としても有名である。

具体的な音源資料については、事前の問い合わせの時点では、当音楽院の Web OPAC より探し当てた“Works for piano solo(1)~(5)”、“Piano music”、“Bartók plays Bartók”の 3 種類のアルバムの視聴をお願いしていたが、実際には、サウンド・コレクションにあるバルトークのピアノ作品に関する全てのアルバムを用意していただいた。

調査方法としては、現行の出版譜(脚注 1 を参照)を同時に見ながら、楽譜に書いてある内容と実際の音との関係性に注目して視聴を行った。また、バルトーク自身の作品の自作自演のみならず、他の作曲家による作品の演奏も視聴した。

2. 調査研究結果

以下では、それぞれの訪問機関ごとに調査研究結果を述べる。

2.1 ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所バルトーク・アーカイヴ

ブダペスト・バルトーク・アーカイヴでは、Somfai 1996 の著書より得られる一次資料一覧と実際の資料を照らし合わせて、資料状況の確認と各一次資料の内容の検討を行った。

本アーカイヴで閲覧できる一次資料は全て、原則複製不可、写真での撮影も禁止とされている。従って、報告者は資料の全体像について文章によって書き記したり、また譜面が複雑な状況になっている場合にはその一部を写譜することによって、調査結果の記録を行なった。また、本アーカイヴで閲覧できる資料は全て複製版として保管されているものであり、具体的にはスキャンされたデータ資料であったり、白黒もしくはカラーコピーによる紙媒体の複製版であったりした。現在、これら一次資料の現物は基本的にはスイスのバーゼル(パウル・ザッハー財団 the Paul Sacher Stiftung Basel)にて管理されているとのことであったが、本アーカイヴに保管されている複製版においても、現物の資料を閲覧する場合とほとんど変わらない体験を得られるため、本調査研究の目的の遂行において問題はなかった。

そして、これら一次資料の詳しい相互関係や資料内容の検討方法については、本アーカイヴ所長ヴィカーリウシュ・ラーズローVikárius László氏とリサーチ・アシスタントの中原佑介氏をはじめとして、研究員の方々から多くの専門的な助言をいただくことができた。

2.1.1 バルトークの一次資料の状況

ブダペスト・バルトーク・アーカイヴにおける調査研究では、まず調査対象となる資料の全体像の把握を第一の目的として調査を行った。今回、Somfai 1996 の著書より得られる一次資料一覧と実際の資料を照らし合わせる作業を行っていく上で、以下に記す 2 つの事柄が重要であるとの知見を得ることができた。

ひとつは、一次資料一覧で用いられている用語の意味を捉える際には注意が必要であること。上記一覧では、自筆資料の大まかな分類として、“Sketch”、“Draft”、“Autograph copy”といった用語が用いられているが、例えば“Sketch”(スケッチ)に分類されているものの中にはさらに“continuity

sketch”という比較的長めの継続的に書かれているものがあり、“Draft”（草稿）との区別がそれぞれの作品や資料によってさまざまであるため、実際の資料をよく観察する必要があることが分かった。また、“Autograph copy”については、直訳すれば自筆の複写譜ということであるが、出版社や献呈者に見せるためのいわゆる「浄書譜」の意味も含んでおり、さらにバルトーク本人による浄書の場合と、2番目の妻であるディッタなど本人以外の人物によるものがあるため、よく確認する必要があることも分かった。

もうひとつは、資料の分類記号についてである。研究対象としている4つのピアノ作品の一次資料は、その「所有権」が大きく2つの機関に別れている。今回訪問したブダペスト・バルトーク・アーカイヴと、アメリカのフロリダにあるペーテル・バルトーク・アーカイヴ[Péter Bartók Archive]であるが、上記一次資料の一覧には、それぞれ“BBA”や“PB”といった略記を頭につけて各資料の分類記号を括弧内に示してある。しかしこの分類記号は両機関がそれぞれに規定したものであり、分類の基準や記号の付け方が統一されていないわけではないため、もし詳しい資料研究を行うのであれば、報告者独自の目録を作成する必要があるということが分かった。

以上のような事柄を踏まえ、用意された資料を確認したところ、《ピアノ・ソナタ》BB88、《戸外にて》BB89、《9つのピアノ小品》BB90の3つの作品の一次資料については、一覧に挙がっている資料を全て確認することができた。

2.1.2 研究対象作品の一次資料の内容の検討

前述のように、ブダペスト・バルトーク・アーカイヴにて閲覧できる一次資料は原則、複写・写真撮影ともに不可であるため、一次資料の内容を検討した結果は、報告者が文章によって書き記したり一部を写譜することによって記録を行なった。加えて、先に述べたように調査対象の資料は比較的複雑な状態となっており、加筆・修正部分も多いため、どの小節がどの順番で配置されているのかということや、どこをどのように修正しているのかということについて、対象資料を観察しながら判断すること自体、想像以上に時間を要する作業であった。そのため、今回の調査研究では、一次資料の内容の詳細な検討を行えたのはほとんど《ピアノ・ソナタ》BB88だけに留まり、さらに《ピアノ・ソナタ》BB88第1楽章の第一草稿（Somfai 1996の一覧にある分類番号で言えば【PB 55PS1】）については、最初の1ページ（p.21）を写譜するに留まったため、用意された一次資料の全てについて内容の十分な検討を行うことは叶わなかった。それぞれの一次資料の内容を詳細に検討するには、当初想定していたよりもっと多くの時間を費やす必要があることが分かった。

今回詳細な検討ができた一次資料はごく一部であったが、同時に、そういった一次資料の細かな内容検討が博士論文研究において必要不可欠な作業であることを裏付ける十分な調査結果を得ることができた。

例えば、《ピアノ・ソナタ》BB88第3楽章の主題について、最初期の段階のスケッチ（メモ）では、旋律の音高が出版譜（fis-）よりも全音下の高さ（e-）で書かれており、かつ第一草稿の段階においても曲の途中（出版譜で言えば38小節あたり）まで、基本的には全音下げた音高で書いていたことが分かった。さらに、《ピアノ・ソナタ》BB88の第二草稿については、第2楽章と第3楽章の間に、音階や旋法を思わせるような音列のメモ書きが残っている。これらの事実からは、バルトークがこれらの作品の創作に当たって調性や旋法といったことについて検討を重ねていた事実が推測されると同時に、これらの作品の分析に際して、調性や旋法といった観点から眺めることの必要性も示唆される。

報告者は本学に提出した修士論文の中で、《ピアノ・ソナタ》BB88第3楽章の主要主題が持つ民俗音楽的特徴について論じたが（木村 2018）、このような調性や旋法に関する視点からは十分な分析を行うことができなかった。従って、本調査研究で得られた上記のような事実は、これまでの研究で不足している部分を補い、さらなる探求を進める上で重要なヒントとなる。

これは本調査研究で得られた調査結果のほんの一部にすぎないが、このように研究対象としている作品の一次資料の内容について詳細な検討を行うことは、作品を分析する際の観点を広げ、作品を多面的に考察していく上での重要な助けとなる。一次資料の詳細な内容検討は、対象作品を多角的に捉え、かつバルトークがこれらの作品で何を試行したのかを明らかにするという博士論文での研究目的と密接に関わってくる必要不可欠な調査であることが確認できた。

2.2 リスト音楽院中央図書館及びサウンド・コレクション

サウンド・コレクションでは、バルトーク自身の演奏による音源資料の視聴を行った。先述のように、事前に問い合わせていた範囲を超えて、バルトークのピアノ作品に関わる音源資料を全て揃えていただいたが、ブダペスト・バルトーク・アーカイヴ以上の時間不足により、こちらも全ての音源資料は視聴できなかった。用意された自演の音源には、ヴァイオリンとのデュオや《2台ピアノと打楽器のためのソナタ》BB115といった室内楽作品も含まれ、より広い目的を考えれば興味深い音源資料が多くあったが、今回の調査研究では時間の都合上、バルトーク自身によるピアノ独奏の演奏を優先

的に視聴した。

自身の作品を自演している音源では、演奏している作品にかなり偏りが見られた。今回視聴した音源資料の中では、例えば《10の易しい小品》BB51第5曲「セーケイ人たちの夕べ」が最も多く計4回の録音が残っており、《2つのルーマニア舞曲》BB56の第1曲が計3回など、複数回録音を残している作品とそうでない作品が分かれた。また、《10の易しい小品》BB51第5曲「セーケイ人たちの夕べ」については全4回の演奏にそれぞれ明確な相違が聴き取れ（ルバートの仕方など）、演奏法を模索している様子も伺えた。

ピアノ独奏の録音を残していた他の作曲家については、バッハ、スカルラッティ、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパン、リストの作品を視聴することができた。自作自演の音源のみならず他作の演奏も同時に視聴することで、作者自身の演奏アプローチを体験的に知ることができた。

3. 考察と今後の課題

ブダペスト・バルトーク・アーカイヴにおける一次資料の調査では、複雑な資料の状況を目の当たりにすることができた。先行研究で言及されているよりはるかに煩雑な資料の相互関係を把握していくことは大変な作業であったが、研究対象作品の一次資料の全体像について十分な知見が得られた。各一次資料の詳細な内容検討を進めることと並行して、報告者独自の資料目録の整理が今後の課題のひとつとなる。同時に、一次資料の全体像の把握に当たっては、バルトーク本人と出版社とのやり取りや当該作品の出版の状況についての把握が不足していることも感じた。これまでの研究で未だ十分に当たることができていない書簡などの資料を中心に、確認していくことの必要性を実感した。

また、一次資料の内容検討においては、修士論文で検討しきれなかった分析視点についてのヒントを得るなど、研究対象作品を今後さらに多角的に探究していくための可能性を多く見いだすことができた。しかし、調査対象の資料全てについて、楽曲の分析にまで至るような詳細な内容検討には切り込めなかった。これは非常に多くの時間を費やす必要のある作業であり、今後も継続的な調査が必要不可欠となる。今後の研究に向けて最重要課題となる部分であろう。

一次資料の検討方法についてはいくつかの課題が見出された。ひとつは、一次資料の中でも楽譜部分の検討に終始してしまい、余白部分などに残されたマジャル語やドイツ語によるメモの内容検討にまでは及ばなかったことである。楽譜の最初の部分に、箇条書きで(1)～(5)の番号を振った事細かなメモが書かれている資料も見られた。これらの文章によるメモも重要なヒントである可能性が大いにあるため、見落とすことなく確実に検討していきたい。もうひとつは、バルトークの自筆資料に見られる特徴について検討していく上で、対象としている1926年に書かれた資料のみならず、それより前の時代やあるいは後の時代の一次資料についても見ていく必要があるということである。今回の一次資料の分析では、バルトークの記譜の仕方についていくつかの特徴が見出された（例えば、作品中に現れる主題の前後にある前奏・後奏の大部分が、吹き出しの印によって後から付け加えられたり、小節数が修正されたりしていることなど）。しかしこのような特徴は、同年に書かれた自筆資料だけ見ているのでは相対化できない。記譜の仕方に見られる特徴については、できればピアノ作品全体に渡って、時間の許す限り自筆資料を検討していきたいと考えている。

サウンド・コレクションにおける音源資料の調査では、こちらも時間の都合上、バルトークによるピアノ独奏の演奏音源しか視聴できなかった。しかし実際には室内楽などアンサンブル作品の録音も多く残っており、中には相手の演奏者との会話まで入っているものもあった。作曲家が持っていた音のイメージを捉えていくためには、バルトークによる演奏の音源を繰り返し、そしてたくさんの種類のことを視聴していく必要がある。こちらも継続的に行っていきたい課題である。

加えて、本調査研究ではあまり強調されていないが、バルトークの音楽を考察する上で「民俗音楽」との関わりは欠かすことができない。今回は計画に組み込むことさえできなかったが、現地の滞在期間や各調査の時間配分を検討の上、バルトークが実際に民俗音楽を収集した地域で生の民俗音楽に触れる機会を持つことも視野に入れて、今後の調査研究を練り上げていきたい。

4. 謝辞

この度は、お茶の水女子大学文部科学省特別経費（国立大学機能強化分）「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラム平成30年度「学生海外調査研究」に採択いただき、貴重な調査研究を実現させていただきましたことを、心より感謝申し上げます。

ブダペスト・バルトーク・アーカイヴでは、所長のヴィカーリウシュ・ラーズローVikárius László氏とリサーチ・アシスタントの中原佑介氏をはじめとして研究員の方皆様に大変お世話になりました。リスト音楽院サウンド・コレクションでは、室長のポール・ペーラPór Béla氏にあたたかく迎えてい

いただきました。ブダペストでお世話になりました全ての皆様に深く感謝申し上げます。

そして、本調査研究の準備段階から帰国後のフォローまで多方面からご指導くださいました、指導教員の永原恵三先生をはじめとする関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

注

1. 作品名の後に続く BB を冠する番号は、ブダペスト・バルトーク・アーカイヴ元所長シヨムファイ・ラーズロー Somfai László 氏によって作成された、バルトークの作品目録番号である。
2. 報告者がこれまでの研究において一貫して使用していたこと、また校訂報告が詳しくなされていることの 2 つの理由から、本調査研究には春秋社版を持参した。

参考文献

伊東信宏 (2010) 「作品解説」『バルトーク集 2』春秋社。

木村優希 (2015) 「バルトークのピアノ独奏作品における民俗音楽編曲の特徴～アーティキュレーションを中心に～」お茶の水女子大学卒業論文。

木村優希 (2018) 「バルトーク作曲《ピアノ・ソナタ》BB88 第 3 楽章の研究」お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科修士論文。

Bartók Archives HP (http://www.zti.hu/bartok/ba_en_06_m.htm?0301).

Lampert, V. & Somfai, L. 谷本一之・横井雅子(訳) 1996 「バルトーク, ベーラ」『ニューグローヴ世界音楽大事典』13, 講談社。

Somfai, L. (1990) The Influence of Peasant Music on the Finale of Bartók's Piano Sonata, *Studies in Musical Sources and Style: Essays in Honor of Jan LaRue*, Madison, 535-555.

Somfai, L. (1996) *Béla Bartók: Composition, Concepts, and Autograph Sources*, California : University of California Press.

きむら ゆうき／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

木村優希さんの海外調査研究は、20 世紀前半にハンガリー人として西洋音楽の作曲界において独自の影響力をもったバルトーク・ベーラの作品を研究するにあたって核心をなす、自筆稿を閲覧するためにブダペストのバルトーク・アーカイヴなどに赴いたものであった。渡航前に研究所長との事前の電子メールによる打合せなどが整っていたため、バルトークの一次資料が十分に閲覧できただけでなく、研究所の研究員との学術交流も果たすことができています。

今回の渡航はバルトーク研究の扉口にしか至っていないが、今後の博士論文をはじめとした研究活動にとって最も重要な、人的ネットワークの構築に、大きく寄与していることがうかがえる。民俗音楽と西洋芸術音楽との双方の要素が交差するバルトークの音楽を解明するために、第一段階ではあるものの有意義な調査研究が行われたと判断し、今後の現地調査によるさらなる展開と学術的貢献が期待される。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (人文科学系)・永原恵三)

Research for the Sketches, Drafts, and Corrected published copies of Bartók's Piano works in 1926

Yuki Kimura

The aim of this research is to investigate the primary sources of Bartók's piano works written in 1926, and to listen the audio documents of the performances played by Bartók himself. I visited the Budapest Bartók Archives and the Sound Collection of the Central Library of Liszt Academy. I found complex relationships among the sources of these works. I also experienced to grasp the sound images of his piano works through the records of performances by himself. It is necessary to continue the research about the primary sources in order to analyze the musical structure of Bartók's piano works in 1926.